

## ＜ビバリーモーニング24-1＞ F誘導路での離発着訓練 *No runway? No problem for Team Yokota*

November 1, 2023

By Tech. Sgt. Taylor Altier  
374th Airlift Wing Public Affairs

10月22日、横田基地で行われた演習「ビバリーモーニング24-1」で滑走路が損傷した想定のもと、横田チームはC-130Jスーパーハーキュリーズ数機の離発着をF誘導路から行った。F誘導路での離発着訓練を横田基地で行ったのは、今回で2回目となる。

この訓練では、横田基地の主要滑走路が損傷し、飛行運用に深刻な支障を及ぼしている—またはそういう事態が考えられるシナリオに基づいて行われた。

横田基地の空輸のハブとしての使命を果たすため、第374整備群、第374運用支援中隊、第36空輸中隊のチームは、滑走路の代替着陸帯として設けたF誘導路から航空機を離陸させる準備を行った。

横田のC-130Jは、長さ約3千フィート（約914メートル）、幅60フィート（約18メートル）ほどの土地があれば離着陸できる。第374運用支援中隊管制塔の管制主任マシュー・フック上級曹長は、横田のクルーたちは余裕をもって離着陸できたと話す。

「今回のシナリオは、任務を遂行する横田の決意を試すとともに、即時戦闘展開能力を示す貴重な機会になった」「こうした作戦を成功に終えたのは、一つの職域だけでなく、航空団全体のスペシャリストたちが力を結集したからだ。今日という日はチーム努力の結晶であり、航空団の能力を示すものだった」

第374運用支援中隊の着陸帯安全担当官および管制塔上級監視監督官ジャスティン・アイビー技能軍曹は、シナリオを実践する間、着陸帯を調査し、適切に標識を付け、また数回にわたる離陸、高速アプローチ、強襲着陸に備え、航空機のクルーや飛行場管理官と連絡を取り合った。

「従来の滑走路がなかったり、使用できない場合、必要な条件を満たす場所に着陸地帯を設けることができる」と第374運用支援中隊飛行場管理官ライアン・ラスケ軍曹は言う。「つまり適切に備えれば、我々のチームは条件の厳しい場所でも航空機を離発着できる能力がある」

この訓練は、航空機のクルーと飛行場運用チームが高度な即時戦闘展開を実践するほか、短く、狭く、入り込んだ、標識のない、細い不整地でも巧みに着陸できる体制を確立し、選んだ場所と時間に展開できる航空兵力を維持する。

